

---

# 死神は深緑に踊る

鋼玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神は深緑に踊る

### 【Nコード】

N6497E

### 【作者名】

鋼玉

### 【あらすじ】

例外なる死神、真白。彼女が命じられた仕事は尋常ではない死に方をした魂の回収であった。死のわだかまる廃屋で二人何を見るか  
夏ホラー2008百物語編参加作品です。7/17完結しました。

## 序、二人の死神（前書き）

あまりホラーっぽくありません。これでよいのでしょうか……

## 序、二人の死神

死神

鎌を携え死者の魂を導きし者。

神に与えられし命を自らの手で絶つた罪人でもある。

少女は定めによって死したにもかかわらず死神になることを請い、

神は一人の死神を同行させることでそれを許した。

黒衣を纏いし二人は今日も死せる者の元へ往く。

その場所は

ある山の中、たった一点のみ静寂に包まれたところがあった。

鬱蒼と茂った木々の間からわずかに漏れる日の光がただ静かにそこにあるものを照らす。二階建てのからうじて屋根の色が赤であったことが分かる程度の朽ちた洋風家屋。

過去に何者が住み如何にして居なくなつたのか、様々な噂が流れていたが真実のところは不明である。

そこはいわゆる『本当に出る』心霊スポットであり、夏場になると若者たちが肝試しに来ては期待はずれと笑いながら帰り……あるいは死に物狂いで逃げ帰った。

そこには確かに何かがいて今までは侵入者に対しほんの少し驚かす程度であった。しかし。

廃屋の二階の部屋。

まず目につくのは扉の下から部屋の中程にまで広がる暗色の水溜り。それは部屋の中央に転がるくまのぬいぐるみを赤く染め、鉄に似た

臭気を放っていた。

その源は壁に取り付けられたクローゼットの扉の隙間。

不意にそのうちから音がし扉を押し分け黒い塊が転がり出た。

もしここに何者かがいたのなら悲鳴を上げずにいられなかつただろう。

それはかろうじて人間であることが分かる程度であちらこちらが欠損し、いくつもの部分に引きちぎられた肉塊。

開け放たれたクローゼットには量からして全部で二、三人分であるうか、人間の仕業とは思えぬほどに変形し損傷した肉塊がうずたかく積みまわっていた。

そこには明確で異常な死のみがあった。

静寂の中、不意に天井のあたりで黒い靄漂い、収束して一對の目玉を形作る。

それはしばし肉塊を見下ろした後外にその視線を移し、視界にカーテンの隙間から見える新たな侵入者をしかと捉えた。

それより十分ほど前。

「やっぱ止めようよ」

廃屋に続く山道を登りつつ少年は先行する友人におびえた様子で言葉をかける。

「大丈夫だってちょっと探検するだけだから」

そんな様子の彼に友人はつり目がちの瞳を笑みの形に細め、先に行  
く。  
探険の為の荷物か、はたまたおやつを詰めているのか、その背には  
膨らんだ子供用のリュックが揺れた。

「でも……」

彼の脳裏では今まで散々振り回されては酷い目に会ってきた彼の勘  
が警鐘を鳴らしていた。

友人は呆れたように息を吐きぶつきらぼうに彼に言い放つ。

「ビビりって言われたいのかよ」

「そうじゃないけど」

ぐだぐだと言葉の応酬を続ける二人、もう目的地の廃屋は木々の間  
から見え始めている。

彼らにとつてこの廃屋を探険することは英雄的行為といえて、廃屋  
に行った証拠でも持って帰ればクラスメイトから賞賛を得ることは  
間違いない。二人の決意が固まり始めたとき、彼等は視界の先に黒  
い霧を見た。

「なんだあれ」

霧は見る間に形を変え、色彩を帯びていく。

その正体を理解し少年達の表情が驚きと未知の物体に対する恐怖に  
染まった。

「な、生首」

彼らの視界で霧は逆さまに浮かぶ少女の首に変化していた。

やばい。

顔を見合せ意見を一致させる。

その瞬間少女の首は少年達の目と鼻の先に移動し、にいつと笑った。

「出たー！」

次の瞬間少年たちは叫びを上げ一目散に山を駆け落ちるように逃げ

て行つた。

少女の首はぱちぱちと眼を瞬かせ彼らの驚きようにけらけらと笑いひとしきり笑つた後、彼女は沈黙し目を閉じた。

それと前後するように彼女の首の付け根の部分に再び黒い靄が現われ収束し首から下の身体を形作る。黒いワンピースに背中の中程の長さの癖の無い黒髪が重力に逆らつてゆっくりとかかる。その肌は血の気が全く宿らず、その唇のみが紅い。

彼女はそのまま体をくるりと回転させて着地し、閉じていた目を開き何かを探すようにきよろきよろとあたりを見回した。

「真白ましろ」

彼女の背後から抑揚のない声がかかる。

不意に名を呼ばれ少女は先ほど年下の少年たちを驚かせた時の様子とうつて変わつて心底驚いた様子で肩を震わせる。

「何故あの子供らを助けた？」

続けてかけられたぎこちない動作で後ろに首を回すと、背後の木の幹が一瞬黒く染まつたのち、そこから黒い影が生え出てきた。

そして黒いローブを身に纏つた影は顔にかかったフードをはぎ取り、少女はその顔を見て安堵の息を吐く。

「黒！」

彼女の背後にいたのは彼女より一回りほど年上に見える青年。

彼は顔の右半分を長い前髪で隠した能面のような顔をゆっくりと少女の方に向ける。

「おどかすなんて趣味が悪い」

自分のことは棚に上げて彼女は彼に非難めいた視線を送つた。

「もう一度問う。何故そうした」

黒、と呼ばれた彼は彼女の言葉を無視し再び機械的に問いかけた。

「だって、あの子たち行かせたら仕事が増えるじゃない」

「だが生者の行動に手出しするのは……」

そう言いながら二人は歩き出す。

歩くといつても僅かに地面から足が浮いており地面に影は映っていない。

それは二人が少なくとも生者でないことを示していた。

「でもさ、ほつといてあとからいやな思いしたくないし」

もう済んだことだし、と彼女は全く悪びれる様子がない。彼の方は沈黙した後、小言を言っても無駄と小さくため息を吐き首を振った。

「……それも一つの回答だな」

「でしょ」

よく言えば無邪気。

悪く言えば無自覚。

彼女はそう言つて木漏れ日を全身を浴びるようにくるくると回る。

途中木の幹にぶつかりそうになりそのまますり抜けるが二人とも気にする様子は無い。

夏の深緑に包まれた中で二人の纏う色は非常に目立ちどこか浮いて見えた。

## 序、二人の死神（後書き）

長い文章を読んでいたいただきありがとうございます。読んでいて気が付いた方もいるかもしれませんが一応この作品は短編「死神は六花に唄う」の続編です。なるべくこの単体で読んでも大丈夫にしましたが……一応真白の相方の名前もセンスゼロなりにつけてみました。なるべく早く後編はのせたいと思います。

## 二、魔屋にて（前書き）

一話で七千文字というのはあまりに読みにくかったなので分割しました。

## 二、魔屋にて

二人の死神は森を往く。

日差しは彼らを通り抜け枝葉は彼らをすり抜ける。

身に纏いし黒は夏という季節には重苦しく浮いて見えた。

「ん？」

それに気が付いたのか、不意に彼女は動きを止め自らの纏う黒い服と彼の纏う黒衣を交互に見つめ首を傾げた。

「ねえ、死神の服って何で黒なの？ 夏とか暑苦しいと思うけど」

「暑苦しいも何も肉体が無いから関係ない」

彼はそう言って相方に無愛想に答えた。

「冷たいなあ」

「……例えばあの時お前をけばけばしい衣装を身にまとって迎えに来たとしたらどう思う」

しかし彼女が不満そうに頬を膨らませるのを見て、彼はあえて直接は言わず彼女に問いかける。実に面倒臭そうな様子だ

彼女はその問いに人差し指を顎に当てしばし考え、半年前の自分が死神になった日のことを思い出し、茶色を帯びた瞳が懐かしさに細められる。

彼女はいわば死神の中でも例外とも言える存在であった。

通常死神は自ら命を絶った者であるのに、彼女は定めに従い病にて死した。

その時彼女を迎えに来たのが黒であった。

今と変わらぬ陰気な顔で黒衣を纏って。

それがけばけばしい格好だったら……一瞬脳裏に極彩色の服を纏った彼が浮かび余りの似合わなさに吹き出しかける。

「黒にはどうせ似合わ……ま、間違いないについて行くのを拒否した  
と思う」

「だろう。死神は死者のイメージに沿った黒衣を纏う方が仕事をし  
やすい」

行くぞ、と言って彼は彼女を追い抜き廃屋に向かって歩き出す。

彼女はそんな彼の後を待ってよ、と頬を膨らませつつも追い掛けた。

「それにしても何で人間って肝試しっていつて幽霊の縄張りに足を  
踏み入れるんだらうね」

彼の後ろをちよこちよここと追いかけながら彼女は退屈を紛らわせる  
ために話しかける。

肝試し。

小さい頃からほとんどの時間を病室で過ごしたため話や本でそう言  
うイベントがあることは知っていた。だが何故わざわざ怖い思いを  
しに行くのだらう。

肝試しに行つてうっかり取り殺された奴の魂回収してこい。

そう、それが今回の彼女たちのなすべきことであつた。

彼女はその対象の理不尽な死因とともに肝試しの意義について納得  
できないものがあつた。

その事には全くだな、と黒も同意しつついくつかの仮定を述べる。

「好奇心、話題づくり、ひよつとしたら死者を見て恐怖を味わつこ  
とで生を実感したいのかもしれない」

死というものは生きているうえでは無自覚なもので、誰かの死にふ  
れてやつとはつきりと自覚する。肝試しもそのようなものだらうと  
彼はあまりやる気のない様子で結論付けた。

「でもさ死んじやったら元も子もないのにね。今回の人たちを馬鹿にするわけじゃないんだけどさ」

真白は対象たちへの呆れを一切隠さない。

「どちらにしろ俺達は彼らを導けばそれでよい」

黒は大半の死神がそうであるように特に興味はないようであるが、ある懸念が脳裏をよぎり眉をひそめる。

そもそも今までこの主は人を殺めておらず今回初めてとり殺したと聞く。

何故かはどうでもよいことであるがここである危険が浮上する。

『もしかしたら自分たちにも牙を剥くかもしれない』

死神は神とつくが所詮は罪人の魂、人を殺すことも魂魄を滅することも一切できない。

それどころか悪い条件が全て満たされれば、消滅という死が待っている。

仕事である以上、彼はそれをなんとかして為すだけであるが危険かもしれないと彼は思った。

「…………ボロいね」

彼の懸念をよそに二人は廃屋の前にたどり着く。そして彼女は遠慮する様子を全く見せず率直な感想を漏らした。確かに彼女の感じたとおり廃屋はあちこちが痛んで今にもどこか崩れそうな様相である。地震が来れば間違いなく倒壊するだろう。

しかし、その今にも崩れ落ちそうな様子と反してそれは圧倒的な存在感を放っていた。

生者ならその霧のように漂いじつとりと纏わりつく死の気配に気持ちが掻き乱されるだろう。しかし二人は、まだ死神になって日の浅い彼女でさえもそれに圧倒されることは無い。

「ねえ、黒。黒もそう思う……」

彼に同意を求めようとした彼女は言葉を一旦切る。

彼は視線を二階の一つの窓に集中させていた。その様子につられるように彼女も視線を動かし僅かに目を見開いた。

哀れな犠牲者達の骸を見ていた廃屋の主。

今から屋敷に侵入しようとしていた二人の死神。

人ならぬ者たちは互いの気配に勘付き視線を交わした。

彼女は初めて相對したそれに怯んでしまい動けない。

彼は視線を鋭くし、中空に右腕を差し伸べるが、彼が行動を起こす前に廃屋の中の気配は急に失せた。

二人は一気に肩の力を抜く。

「何……今の？」

震えた声で真白は問う。

「この主だ」

腕を下ろしつつ彼は落ち着いた様子で答える。

しかしその声色はいつもにも増して硬い。

「上からはできればあれも回収という話ではあるが諦めよう」

「あの幽霊も回収しなきゃいけないかったの？」

彼は淡々と彼女の知らなかった仕事の内容を語り、彼女は心底嫌そうな顔をする。

あの少し視線を合わせただけで圧倒されるあれをか……

「あれ以外にも何匹がいるからできれば説得しろと……いつもの嫌がらせだな」

彼女はかなり無茶な方法で死神になったためか内容は伏せておくが何故か嫌がらせの様な仕事が多い。それは死神としてあまりに未熟

な彼女の補佐かつ監視を行っていた彼がとばかりを食らうことが多かったのだが。

「そんなあ」

「できればの話だ」

怯える彼女の頭にポンと手をのせる。

「今回は目標を回収すればそれでいい」

彼は心の中で先ほどよぎった不安を打ち払えずにいなながらもそう彼女を慰めた。

彼女はその体温の無い、霊体故に感じることでできる感触に支えられるかのように小さく頷く。

しかし、その瞳には恐怖がありありと滲み出て肩が僅かに震えていた。

「……どうした」

彼女の頭から手を離して訝しげに問い掛ける彼に彼女は何でもないと首を振る。

「それなら早く行こう」

彼は右手を軽く虚空に向かって振る。

腕の輪郭が崩れ戻った瞬間にはその腕には黒を基調とした大鎌が握られていた。

死神の鎌、彼らが仕事のとくのみ使う道具にして死神としての核。

形を維持するのにある程度気を使わなければならないので仕事の時以外は面倒なので自分の内にしまっておく。

つまり、そういうことだ。

その様子に彼女は彼の言葉が冗談でないことを悟るが戸惑いを隠せない。

「……彷徨う魂魄が怖いなら待っていていい」

「そんなことない」

自分の心中を見透かされて、彼女は動揺を噛み殺しに顔をあげた。

「……隠しても無駄だ。いつも街中で奴らとすれ違ったびに逃げようとしているだろう」

振り向いた黒の口の端が珍しくつり上がる。

見透かされている、と彼女は唇を噛み締めた。

彼女は正直言つて生前から怪談の幽霊、つまり浮遊霊の類が怖かった。

死神となりそれらの側に立つこととなつても、未練と妄執の赴くままに土地に留まり街を死んだその時の姿で彷徨う、それとすれ違つと逃げたい衝動に駆られていた。

怪談話の中で生者に崇るその姿が恐怖の根源なのかもしれない。

もちろん、自分もたどつた道である仕事の対象である死者はその死に方がどんなに悲惨であろうと怖くは無いのだが。

「どうする？」

淡々とした声で彼女を促す。

彼は無愛想であるが彼女の意志をある程度尊重する。

そのことは彼女も理解していた。

彼女は小さく頷き左手を軽く虚空に差しのべる。

腕が彼の時よりかなり遅い速度で崩壊し黒い靄となりそれが色を失う。

それが二つに分かれ一方は腕になりもう一方は大鎌となる。

彼の大鎌に比べれば一回り小さい刃の先まで白い大鎌。

玩具にも見えるどこか頼りないその柄には雪の結晶の彫刻が一つだけ施されている。

死神の鎌は基本的に形状は似たようなものが多いが、個人の性格、想いによって形を変える。

しかしながら万人のイメージする鎌の形がほとんどであり、死神がほとんどが何らかの心の闇を抱えることから形は自然と似てしまう

が、たまに形状の違うものも現われる。

彼女の場合、『雪』が死神となるに至った経緯に深くかかわっていた。

「仕事だもの。怖い何だの言っただけでられない」

恐怖は拭いきれない、だがそれは仕事を拒否する理由にならない。

渦巻く思いを振り払い彼女は彼を見上げる。

その言葉に彼は目を細め、それでいいと呟き彼女に手を差し伸べる。

二人で行けば大丈夫だ、彼の眼はそう語っていた。

「ありがと」

彼女はその手を握り返す。

互いに死んでいるため体温などは感じぬはずであるが、その手はどこか温かく感じた。

「一応礼儀として正面から行く」

窓から入って相手の不興を買うのだけは避けたい。

そして二人はそれぞれ片手に鎌を持ちゆっくりと暗がりに入って行った。

ただ死者の魂を導くために。

廃屋の内装は外ほど損傷が酷くはなかったがかなり荒れていた。

二人は一つ一つ部屋を見ていく。

「やっぱり幽霊多い……」

何匹かなんて嘘じゃない。二桁は絶対いる。

真白は心底怯えたように呟く。

人、動物に限らず色々と犇めいていた。

同じ存在だからこそはつきりとその姿が見えてしまうので質が悪い。

「溜まり場になってるんだろ。そういう場所もたまにある。」

死神という存在が物珍しいのか寄ってくる者も多く彼女は思わず黒の腕にしがみつく。

彼はそんな彼女にため息をつきつつそういう者達に如何用か、我らは汝らに害なすつもりはないと言い放つ。

ほとんどの場合それならそれで、と引き下がるが中には二人の服に腕にすがってくる者もいて彼女はさらに黒の腕を強く抱きしめる。

「アイツラも送るならワタシ達も送ってくれ」

彼らはそのようなことを口々に発する。

しかし彼らはそれ以上の害を及ぼさない。

その様子に恐怖が和らいだのか彼女はおずおずと尋ねる。

「私たちの仲間が来なかったの？」

それに対し彼らは来なかった若しくは来たが、彷徨うことを選んでしまい後悔しているといった。

「そうなんだ」

彼女はそう言いつつ入る前にあれほど怖がった自分を恥ずかしく思った。

自分もあの時彼についていくか留まるかの選択を迫られた時この世に留まりたかった。

死神になるという選択肢を思いつかなかったら彼らと同類となっていただろうから彼らを恐れたりすることは間違っているのだ。

「送ってほしいものは後で送ろう」

彼は彼女の様子に気を配りつつ彼はそう言って鎌を一閃させる。

幽霊の類に対しても殺傷能力はほとんどないそれだが、まわりついでくる彼らを離れさせるには充分であった。

「とにかく今は通せ」

何の感情もこめられぬ言葉であったがその言葉には死神独特の陰鬱さと有無を言わせぬ冷酷さが宿っていた。

一つ目の部屋を通り、二つ目の部屋を過ぎる。

水が止まって久しい台所を通り過ぎるとそこはリビングであった。

「外で睨んできたの、姿を現さないね」

「機を覗っているんだろう」

二人は目標とする死体がないかあたりを見回し、黒は体の一部を伸ばして行って調べるが見つからない。ここの住人が何らかの理由があつて引越す、そのあと誰も住むことがなかったことが彼女にもわかった。

その時彼女は床に転がるあるものを見つける。

「黒、あれ」

彼女が指さす先に彼も視線を動かすとそこには写真立てが転がっていた。

「拾えと？」

「だって私じゃ無理なもの」

わかった、と彼はため息をつき一時的に繋いでいた手を放し、指先に意識を集中する。

要は幽霊が生者の頸を絞めるのと同じだ。

彼女はまだ死者の魂を刈る以外のことは全くと言っていいほどできず、彼に頼りつつも僅かに表情を曇らせた。

そんな彼女をよそに彼はひろい上げられた写真立てに積もった埃を親指で拭くと、色褪せた写真が姿を現した。

「家族だね」

「前の住人のものだろう」

大人の男女に二人の少女に一人の少年。

カメラに向かつて笑いかけるその姿に真白は今もどこかで生きる両親のことを重ねて微笑んだ。

「この誰かがここの主なのかな？」

「そうかもしれないな」

写真立てを元通り床に置き、二人は再び手をつなぐ。

「一階はここで終わりだからやっぱり二階だね」

浮遊しつつ廊下の階段に二人は移動する。

さっきの黒の言葉があつてか幽霊たちは絡んでこない。

『アノ子ヲ怒ラセナイヨウニネ』

二人が階段を見上げた時、足元を歩いてきた猫の霊がそう忠告する。その言葉に二人は顔を見合わせる。

「うん、努力するよ」

黒が返答する前に真白が先ほどより幾分か怯えのとれた声で猫に返答した。

彼に頼つてばかりでは駄目、と心中で彼女は呟いた。

彼らは気がついていなかった。

天井にぶら下がるようにして背後からじっと観察している黒い霧を。猫はその場にとどまり顔を洗いつつそれをみとめ、意味ありげ目を細めた。

### 三、骸と亡霊

#### 二階

「あの部屋だな」

「だね」

階段を登りきった瞬間に二人は交互に眩き無意識に互いの鎌を握りしめる。

それほどまでにその部屋から死の気配が漂っていた。

「行こう」

他の部屋に興味を示すことなくまっすぐ向かおうとしたが不意に彼女は妙な事に気が付き移動を止める。

「ねえ、何で一回にあんなにいた幽霊がないの？」

言い知れぬ不安をその顔ににじませながら彼女は尋ねた。

そこで彼も足を止めその違和感に気が付く。

感づけなかった自分の失態に舌打ちしつつ、彼女は幽霊が怖いゆえにその違和感にいち早く気づいたのだろうと結論付ける。

「それは……………急いだほうがいいかもしれない」

その言葉に彼女もこくと頷く。

未熟な彼女でさえもそれが何を示すか理解した。

つまり

近くに主がいるということだ。

二人は焦りを感じつつその部屋に入るなり立ち止まり息をのむ。

部屋の中はカーテンで光を遮られ薄暗い。

部屋の中央には暗色の水溜りの上にくまのぬいぐるみが使っている。視線をさらに動かしていくと他にもぬいぐるみのようなものが……

「ぬいぐるみではない」

彼はその物体の正体を察して瞠目する。

真白もその正体に気がついたようでもつないだ手を通して震えている様子がはつきりと感じられた。彼らに嗅覚が残っていたのならすさまじい鉄の臭気と、肉が朽ち始めた臭いをとらえただろう。その光景はすさまじいの一音であった。

その肉塊に近い壁にクローゼットがあることに気が付き、彼はつかつかと近づき半分開いていたその戸を完全に開いた。

「ひっ」

「これは……」

さすがに死体を見なれている彼にもこれはきついと感じられた。

彼女に至っては彼の腕に強くしがみついて震えている。

考え付く限りの破壊を行ったその死体、命令にあった数とちょうど合うようである。

「何か…… 八つ当たりしたような感じがするね」

精神的ダメージから復帰したのか彼の腕に抱きついていていた真白はその腕を解き死体を見下ろす。

「そうだな」

「この人たちもこんな目にあうなんて思わなかったよね……」

彼女はそう言っただけ目を閉じ一瞬黙祷する。

先ほどはどこか間抜けな死に方をした彼らを馬鹿にした様子であったのに今は死者に対する憐れみを隠し切れていない。彼はその様子を特に咎めることなくただ見つめた。

黙とうを終えよし、と呟いた彼女はつないでいた手を放し鎌を構える。

「黒に頼ってばかりじゃ駄目だから私が回収するね」

そう言っただけ自らの鎌を振るい刃の腹で死体を撫でた。

『この肉体にかつて宿りし魂よ、姿を現して』

心の中で祈りを捧げると、靄のようなものが現れ、人の形になった。よかった、まだいた。

彼女は心の中で安堵する。数日前の死体だからもういなくなっていると思っていたが、まだ体から離れていなかった。

人の形になった魂は男が二人、女が一人。間違いない。

彼女は息を吐き魂を狩ろうと左手で鎌を大きく振りかぶろうとした。その時。

クローゼットの扉に取り付けられた鏡。

真白と黒は鏡に映らないためそこには何者も映らないはずである。ここに一对の目玉と大きく裂けた口が映る。

しかし、彼女は精神を鎌と魂魄に集中しているため気がつかない。

「っ真白！」

黒は叫び彼女を鏡の前から引き離そうとしたが一瞬早く彼女の右腕をつかみ鏡の中に引きずり込んだ。とつさに左手をつかむがその力に勝つことができずそのまま彼も引きずり込まれそうになる。

しかし、鏡の中に消えつつあった彼女はそんな彼に向かってにっこりとほほ笑んだ。

そして彼女が消えたあと、彼の手には白い鎌を握りしめたままの彼女の手首のみが残った。

まさか鏡の中にいたとは……油断した。

彼は沈黙したまま残された彼女の手を握りしめる。

その表情からは何も読み取れない。

その心中に渦巻くのは後悔か焦燥か。

彼女と出会って半年、自分の犯した罪の中に感情を封じたただ魂魄を運ぶだけの道具であった彼に何らかの変化を与えつつあった。

彼はもう何も映っていない鏡面に触れる。

しかしいつもどおり感触なぞ感じることはなくただ扉の反対側に指は突き抜けた。

だとしたら……予想できる現象はただ一つ。あの主もこんな真似を  
できるならなかなか年季の入った魂魄のようである。

どこまでも歪んで変質してしまつてはいるが元は人間であろう。  
どうするべきか、彼は判断しその目を閉じ黒衣の裾を触手のように  
伸ばし彼女を探そうとする。

「ん？」

それを実行する前に彼の手の中で何かが動いた。

目を開けてその正体を確かめる。

彼女の手首。

未だ鎌を手放さないそれが彼の手から抜け出そうと蠢いていた。

彼はその求めに応じ手を放してやる。

するとその手は鎌を握つたまま人差し指を彼の掌にあて文字を描い  
た。

わ、た、し、だ、い、じ、よ、ぶ、し、じ、と、を。

『私は大丈夫。仕事を果たして』

その文字はそんな意味であろう。

そこで彼は彼女がわざと手首を体から切り離したことに気付く。

死神の鎌は死神の核でもある。

それを折られれば彼らは消滅してしまうが逆にいえばそれさえ折れ  
なければ彼女は何とか無事でいられる。ただそれがそばにないと唯  
の魂魄同然であるがとりあえず全身を引き裂かれようが食われよう  
がとりあえずしばらくは大丈夫である。

「的確な判断だ」

確かに彼自身彼女を助け出さなければならぬことは分かっている。  
しかし、彼女を探し出すのは厳しくやはり仕事を優先したい。

そんな彼の迷いは、彼女自身が残した言葉で解決された。

「それならこちらはやるべき仕事を果たそう」

手首を振るい彼女の一部を小さな燐光と変え、黒衣の内に隠し自分

をよく表した暗い色の鎌を構える。そして彼女に呼びさまされ  
上を漂う魂魄たちにその刃先を向けた。

#### 四、闇の中の真実（前書き）

ちょっと読みにくいかもしれませんが……

#### 四、闇の中の真実

一方彼女は闇に包まれた空間を漂っていた。

ぼんやりとあたりを見回しつつ彼女あの一瞬の間自分に起きたことを思い起こす。

『そうか……私あの幽霊に食べられたんだ』

そう、鏡は所詮物体を移す加工されたガラス板でしかなく、黒がやっただ通り霊体で触れようとすり抜けるだけだ。

それなら彼女に何が起きたかという……簡単だ、鏡の内に隠れていた彼女に取り込まれてしまったのだ。

つまり、抜け出すにはあの幽霊と向かい合わなければならぬということ。

状況は実に悪いが、何とか最悪の事態だけは避けられた。

自分の一部と鎌を彼に託したからよほどのことがない限り大丈夫だ。ただ問題は自分の精神が崩壊してしまったらどうしようもないという点であるが。

今の彼女は幽霊と大して変りはしないのだ。

「黒はどう思うだろうな」

感情を表に現さない彼が自分の勝手に何を思うか考え、少しくらい心配してくれたらいいなと呟く。実を言うところと見捨てられそうで怖い。

今は片腕の喪失感とともに彼を信じ、自分はここの主と向かい合うしかない。

やはり幽霊というものは嫌いだと思った。

「いるんでしょう？ 幽霊さん」

「ええ」

すぐさま掠れた声で返答が来て彼女は身を固くする。

視線の先には一人の少女がいた。

年のころは七歳ぐらいだろうか。顔を蔽い隠すように伸びた髪の毛の間からぎよろりとした目が覗く。ここの主、その意識の部分なのだろう。

「ねエねえ、あたシのお友達をどうすルつもりだツタの？」

その声はところどころトーンが狂った狂気がありありと感じ取られるものであり、真白はその顔を僅かであるが引きつらせた。

「あのね、私、あの人たちをお迎えに来たのよ。だから……」

「ふうん。おねエちゃんもあタしと同じで死んでルんだよね。」

「ナンデお迎えニくるの？」

彼女はずいと真白の元に接近しケタケタと笑う。

血の臭いなぞつくわけがないのに彼女の口からは鉄に似た臭気が漂っていた。

『この子、死神を知らない？』

言い知れぬ恐怖を抱きつつ、彼女の態度から真白は思った。

しかし何故、彼女は知らないのか。

死神など迎えに来なかった。

脳裏に先ほど一階を漂っていた幽霊の言葉がよぎった。

「お仕事だからよ。勝手にあなたの家に入ったことは謝るわ」

自分が死神であることなぞ今は関係ない。

力の核である鎌の存在を知られる方がまずいので真白はあえて黙っておくことにした。

「あなたに何かするつもりはないわ。だから……元の場所に帰してくれない？」

なんとなく話の通じない相手であることはわかりつつできるだけ刺激しないように少女に頼み込んでみる。

少女はきよとんとした様子で首をかしげる。

そして言われた意味を理解できたのかキャハハと笑った。

「あの才友達の代ワリに遊んでクレたラね」  
嗜虐性を剥き出しにした声が発せられたその瞬間少女は真白の腕を  
まるで人形のように引きちぎり、続いて真白を力の赴くままに引き  
裂き始めた。

瞬く間に四肢が千切られ胴が裂かれていく。

「アハハ！ 死ナイ死ナイ面白イ！」  
壊れたような笑い声を発しながら髪を振り乱し彼女は遊びと称した  
一方的な破壊を続ける。  
物理的な力ではないが非常に強いそれは、まるで豆腐のように真白  
を削っていく。  
引きちぎられ飛び散っていくそれは人体のそれとは違いあまり凄惨  
さを感じさせず、すぐに霧散する。

少女の目に宿るは狂気。

両の腕に破壊の力を与えているのは衝動。

真白は唇をかみしめ、ありありと恐怖の色を浮かべているが抵抗す  
ることはない。

何故なのかよくわからない。

少女が彼女を引き裂くたびに流れてくる何なのかよくわからない記  
憶の断片が彼女に抵抗する気を失わせていた。

『死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくな  
い死にたくない』

すでに死んでいるのに真白は死を再び感じ耐え切れず叫びをあげる。

それは少女の破壊衝動をさらに高め実に楽しそうに彼女を引き裂く。

『私は、私のできることを』

せめて狂気に沈まぬように真白はそう自分に言い聞かせる。

黒が仕事を果たせるように自分はここで大人しく引き裂かれよう。

半年前のあの日、生きている間に見ることのかなわなかった世界を見ていたいという思い故に本来刑罰である死神となることを願った。しかし待つていた現実はいつも黒がいないとまともに仕事ができないという何とも情けない現状。

世界を見たいという願いは叶ったが引き換えとなる仕事を口々に果たせていなかった。

黒はそんな彼女を特に責める様子はなく、言うべきことのみを告げて淡々と仕事をこなす。彼女はあえて責められぬが故に余計自分の不甲斐なさを痛感していた。現に今も彼の足手まといである。

「オネエちゃん、死にたくない？」 「すでに半分以下になった真白をつかみ上げ彼女は楽しそうに笑う。

「死にたいわけ……」

「でも死んでやるよね」

死んじやっているのに死ぬなんておかしいねとって彼女は真白の首から下を引き千切りついに彼女は首だけになる。

その時までには真白と少女は何度となく触れ合い、霊体ゆえに断片的な互いの記憶が流れ込んできていた。

それは繋げるにはあまりにバラバラであった。

しかし、真白の中でそれはある記憶を形成し始めていた。

『まさか』

不意に真白の中ですべてが繋がった。

二階で見た骸。

さつきから繰り返されるある言葉、そして彼女の死後遅すぎる時期に芽生えた狂気と破壊衝動、それが触媒となり導き出された答えはあまりに悲しいものだった。

「あなた……死んでいたことに今まで気がついてなかったの？」

少女に髪を鷲掴みされながら真白は仮定された事実を告げる。

どうやら正解だったようだ。

みるみる少女の顔が驚愕に歪み次に恐怖に震え始めた。

「そ、そんなこと」

急に狂っていた声のトーンが戻り、姿が変化し真白が一階で見た写真の少女の姿となる。

先ほどとは違い、あちこちに血飛沫を浴びてはいるものの癖のある肩より少し長いくらいの髪に縁取られた顔は年相応の恐怖を感じさせない可愛らしいものである。

彼女は真白の言葉を否定するかのように首を振り、その勢いで真白の首は少女の手から離れ、少し離れた所に浮遊する。

「あの三人が肝試しに来た瞬間、気がついたんでしよう？」

あの八つ当たりするようにズタズタにされた死体。少女は何らかの理由であの時自分の死を理解し、狂気と衝動の赴くままに三人を殺したのだ。

細切れにされ霧に帰った真白の一部が少しずつ彼女の元に戻っていく。

しかし、引きちぎられたショックか、それが再び自分の姿を形成することはないがそれに構わず少女に向かって真白は語りかける。

「じゃあなんで突然彼らを殺したり、私を引き裂いたりしたの？」

「それは……」 事実気づかれた故に少女にはそれから逃げることはできなかった。

憑きものが落ちたような表情で少女は俯く。

人間というものは忘却できる生き物だ。

それは本人の望む望まずにかかわらず起きうるものであるが、重要な意味を有している。

そう、心の安定のためだ。

少女は十年前に死んでいた。

少女は自分の死があまりに悲惨だったゆえにその記憶を死の認識とともに忘却し、時を経て思い出した。

気づいたら一人ぼっち、目の前には自分を化け物を見るような目で見える者、彼女はやり場のない悲しみと怒りに囚われた。

「……死にたく無かったよ」

少女は自らの両手を見つめ悲しげにつぶやき、意図したのかその目には涙が生れ出る。

「それは私もよ」

真白は首の状態で少女に近づいていく。

首まで引きちぎられたら笑えないが彼女は近づくことをためらわなかった。

「おねえちゃんも？」

「ええ、私の場合は病気だったけど」

半年前の雪の日、自分も死んだという事実を目の前にして混乱したしかし、いつ死んでもおかしくないと常日頃から言われていたのであっさりそれを受け入れられたがあ那时的胸の奥にのしかかるような絶望は忘れられない。ただ真白にとっての死は肉体からの解放であって舞い落ちる雪を見ているうちに死への絶望が不思議と薄れ、そして黒と出会った。

「でもあなたは私も何倍もつらかったんだよね」

真白はそう言って目を伏せる。

未だに霧散した体は戻らず抱きしめることもできず、気の利いた言葉をかけてあげられるほど彼女は賢くない。

しかし少女の置かれた状況がどれほど絶望的だったかはわかり、たった一言だけことば。

少女にとつての死は唐突なものであり、自分の死に様を見てすぐさま心を閉ざすに値するものであった。そして他の幽霊や死神の姿すら見ることを拒絶し十年が過ぎ、自分の死を思い出した瞬間には絶望と孤独が彼女を押しつぶし、狂気の亡霊と化したのだ。

少女はただぼろぼろと涙を流し続け、真白は何も言わずそれを見守り続けた。

「…………あたし、どうすればいい？」

少女はうなだれたまま真白に問いかける。

真白はその言葉に一瞬視線を泳がせて何かを考える。

「私としては、一緒に送ってあげたいけど…………結局はあなたの判断だと思うよ」

死神は答えを強制してはならない。

すべては死者の意思を尊重すべきと黒にいつも聞かされていて、真白はすっかりと覚えていた。同時に必要以上感情移入してはならないということもいやというほど聞かされていたが彼女には到底無理なことであつたのでそこは無視していたのだが。

「送るって？」

少女は真白の言葉に食いつくように問いかける。すべてを思い出し、もう彼女はこの世にとどまる必要がなくなった。

やり残したことができるほど長く生きていなかったから。  
ただこの場にとどまり続ける方が苦痛であった。

「死んだ人がみんないるところに送るってこと。それが私の、いや私たちの仕事だから」

色を変化させるくらいには回復してきた自分の体を伸ばして少女の頭にポンと載せわしわしと撫でる。その時ほんの一瞬であるが真白は目を見開いた。

まだ、記憶のピースはそろっていなかったことに気がついたがなるほどね、と納得したように呟いただけであった。

「あたしも送って貰えるの？ もう一人じゃないの？」

一人という言葉が少女は強調する。死を実感した今、寂しくてたまらないのだろう。

そりゃ十にも満たない少女だ人恋しい年頃だ。

「ここにもいっぱい仲間はいるよ？」

真白はその言葉にほんの少し意地悪な言葉を混ぜる。

ここがここまで幽霊屋敷となったのは少女の死が原因であることは明白だ。

そういえば黒は仕事を遂行しただろうか……愚問か。自分じゃあるまいし。

「そうじゃないのそうじゃ……」

少女はうまく言葉に表せなかったのか、ただ首をふるふると左右に振る。

もちろん真白にも彼女が何を思っているかくらいはわかる。

単にさっきの仕返しを少ししてやりたかっただけだ。

「わかった。ついてくるのね」

真白は微笑んで意思を確認する。

一時は駄目かと思ったが……そうだ、まだ確認せねばならないことがある。

「だけど、あなたはちょっと悪いことをしちゃったからそれは覚悟してね」

発狂していたとはいえ少女は三人の人間を殺めた。神というものは慈悲深いที่甘くはない。それは真白が死神となると請うた時に魂ごと消されかけたことから嫌というほど実感している。少女とて何らかの落とし前は付けさせられるはずだ。

「うん。わかってる」

このままここにいて何かの拍子に同じことを繰り返したくないからと少女は呟く。

真白は満足げに頷き最後の確認をする。

「それでも来るんだね？ 朝美ちゃん、夕美ちゃん」

「え？」

真白の言葉に少女、いや朝美と夕美と呼ばれた魂魄は素っ頓狂な声を上げる。

「あなた、一人じゃないんだよ。あなた、自分の名前どっちかわかる？」

そう、真白は彼女の頭を撫でた時彼女の、いや彼女らの名前を知った。

「……どっちかじゃない。どっちも」

彼女もそこで理解した。

自分に双子の姉妹がいたこと。そして同じ時に死んだこと。

名前というものは重要なもので、死神もその魂が目的のものか確かめるために名前を告げて確認する。わからない場合は記憶を読み取る。

真白は今までそれがまったくできなかつたが今、偶然であったのが出来たのだ。

「どつやら双子ってよく似てるからくつついちゃっていたみたいね」名前を思い出し二人に戻った少女たちを見て彼女は笑う。

「近すぎたから気がつかなかったてこと。死の記憶とともに互いのことを忘れちゃってたんだね」

少女達は互いに顔を見合せ沈黙する。

「ひさしぶり。朝ちゃん」

「ひさしぶり。夕ちゃん」

互いの手を握りそう言って二人は笑った。

その様子に真白は眩しそうに目を細めた。

そして兄弟というものがいなかったためほんの少しだけ嫉妬した自分に苦笑した。

自分にできることを、そう願い動いた結果に彼女は満足していた。

確かに自分は役立たずだ。

だが自分にできることを積み重ねていけば黒の横をパートナーとして歩くことができるのかもしれない。

「じゃあいこう……あ！」

真白は言いかけて硬直する。

「ねえ……ここから出してくれないかな？」

ばつの悪そうな顔で笑った真白に少女達は顔を見合わせる。

どうやらここが少女たちの中であることをすっかり忘れていたらしい。

『うん』

大分輪郭を取り戻した彼女の両側に二人は並び、朝美が右手を夕美が左手を振る。

一瞬あとに彼女らの前には廃屋の中の光景が広がった。

終、真白と黒（前書き）

エピソードです。

## 終、真白と黒

山の斜面に生い茂る木々の中、一際高いその木に二人はいた。

「もともとの廃屋は、別荘だった。両親たちが外出し供達が留守番していた時悲劇は起こった」

青空の下、木の頂上に立ちつつ黒は静かに咳く。

「そう、お金が目的だったのかはたまた違う目的か。その屋敷に何者かが侵入し、留守番中であつた子供たちにその手に持った斧を振るつた」

その少し下の枝に腰掛けつつ真白は続けて表情に影を落とす。

そうしてあの少女達は死んだ遺体の状態は推して知るべし、悲惨にもほどがあつたらしい。もう一人の少年については彼女はよく知らないが黒が一命を取り留めたようだとだけ告げた。彼女としてはそれを信じるつもりである。

彼女が戻ってきたときには黒は目標たちだけでなく廃屋のほとんどの魂魄を送り終えた後であつた。

彼女も黒に手伝ってもらつて体を再生し、腕を接合したのち少女たちを送つた。

『ごめんなさい。ありがとう』

少女達は別れ際にそう言つて彼女に頭を下げた。

この先少女達にどのような裁きが下されるかは彼女たちの仕事の範疇でないし、口出しできるほど彼女たちは偉くはない。あくまで死神は案内人、所詮は底辺である。

「でも、何とか仕事を果たせてよかったね」

山の裾に広がる街を見下ろして彼女はそう言つて安心したように笑う。

いつもの仕事のはずが妙な方向にもつれこみ、一時は駄目かと思っ

たが何とか果たすことができた。

「ねえ、黒。私も少しは役に立ったかな？」  
足をぶらぶらと揺らしつつ真白は問う。

「……少しは。だがあまり感心はしないやり方だ」

青い空を見上げながら黒は全く表情を変えず返答する。

その手にはすでに鎌はない。

彼自身としては状況が状況であった者の片方が囿になり、説得を試みるという方法にはあまり賛成できなかった。

「そっか。ごめん」

真白はそう言って苦笑する。

まだまだ彼の足を引く張る日々は当分終わらないかな、と思う。

死神となつて、いやなる前から彼には世話になつた。

だから、少しでも役に立ちたい、死神として一人前になれたらと彼女はいつも思う。

「……心配した」

「へ？」

しばしの沈黙ののち彼が紡いだらしくない言葉に彼女は間抜けな声を上げてしまう。

あわてて彼を見上げると、視線をそらし困つたように頬を人差し指で掻く彼がいた。

いつも眉間に皺が寄っているか、ため息をつくか、どこか馬鹿にしたように笑うか、無表情かのいずれかな彼らしくない。

「何か憑いてる？」

目を瞬かせて呟く彼女にため息をつく。

「憑くなんてことはあり得んだろう普通。何故そこに思考が飛躍する」

「いやだつてあなたにしてはあまりにありえなかつたから」

遠慮も何もない彼女の言葉に彼は頭をがしがしと掻いて思考がまとまつたのか口を開く。

「お前と俺は仲間なのだから。心配くらいはする」

「そっか。そうだよね……ありがとう」

仲間と読んでもらえたことに彼女は心底嬉しそうに笑い感謝の言葉を零した。

黒はそれに小さく頷き、彼女が見ていた街並みを見つめる。

「それに、あの時、お前と出会わなければ俺は人形も同然だった」  
彼女はその言葉にハツとしたように顔をあげる。

そこで彼女はさらに信じられないものを見た。

そう、彼は笑っていた。どこか慣れてないながらも軽蔑の意味を含めていない純粹な笑顔を彼は浮かべていた。

「半年間、言おうに言えなかったが」

ありがとう

そうはつきりといった。

「そんな、私だってあなたに出会わなきゃこうやってここにはいなかった」

彼が選択の余地を与えてくれたから、断罪されそうになった時に庇ってくれたから自分はここにいる。肩を並べるにはあまりに未熟だけれど自分のできることから少しずつ彼に近づいていけばいい。

出会うべきして出会ったのか、それはわからない。だが二人が共に歩くことで互いに何らかの救いを得た。

その点では二人は最高の仲間ともいえた。

『行こう』

二人は同時に呟き、木の枝から離れる。

一瞬笑い合ったあと二人の姿は霧散し消えた。

彼女と出会ったことで感情を取り戻した彼。  
彼と出会ったことで新たな生を得た彼女。

二人はこれからも共に往く。  
罪を償うために。

願いの代償を支払うために。  
死者の魂を導くために。

## 終、真白と黒（後書き）

いかがでしたでしょうか。ホラーらしくなく非常に申し訳なく思います。結局ドタバタと物語を閉めることとなり自分の力不足を実感しています。もしよければ感想等お聞かせ願えればと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6497e/>

---

死神は深緑に踊る

2010年10月22日00時39分発行